



新見家畜保健衛生所長 国定 登幾雄

この頃思うこと

もともと筆無精で書くことに自信はないが、せつかく与えられた機会なので、阿新地域における畜産の大宗ともいえる、和牛を中心に感ずるまをまとめてみることにした。

近年経済の高度成長の波は農山村にも波及し、その結果として米の生産調整、労働力の都市流出、いわゆる過疎といつた現象が現われ、農山村は経済的にも社会的にも一大転機に直面しているが、阿新地域においても例外でない。

この建て直し政策として、従来の稲作中心の農政から他の部門、特に畜産振興を中心とした総合農政の展開がなされているわけである。こうした時代の流れの中にあって、かつて千屋牛として、また阿哲牛として名声を博し、かつジニセを誇った阿新地域であるが、さてその現状はどうであろうか。

率直にいうと飼育者は老令、婦女性の傾向にあり、したがって積極性を失い、今日なお畦畔雑草と稲ワラに依存した小規模農家が大半を占めているように思われる。すなわち過去における副業的存在でしかなく、中には觀賞盆栽の牛飼いの域を脱し切れない農家もあるほどである。これは単に和牛にかぶさる宿命として、簡単に片付けてよいものかどうか考えさせられる。

しかし、反面優良牛の生産地として、また供給源としての大任を果している少数精鋭農家の特殊的存在を忘れてはならない。これらの農家の手になる傑出した良牛は、改良の基礎牛として、大いに貢献してくれることはもちろんで、高く評価するところであるが、さらに重要なことは、地域全体を対象とした形、質、量にわたるレベルアップこそ一層望まれるところである。

本県においても、今後の食肉需要の増大に対処して、牛肉資源の確保とともに県産牛の名声をさらに高揚することが、今日課せられた責務であり、肉用牛振興が本年度重点施策として、とりあげられた所以もここにあると思う。

さて阿新地域における和牛振興の方向としては、もとより恵まれた土地基盤によるエサの確保、放牧等による労働の省力化、さらには優良牛の生産こそ多頭飼育経営への重大要素であることは言うまでもないが、これを推進助長するため、家畜衛生の立場からも、いわゆる生産衛生、放牧衛生を重点的にとりあげ、徹底を期しているところである。しかし指導上における問題点もまことに多い。たとえに馬を川のとりに連れて行くことは容易であるが、さていかにして水を飲ませるか困難なことであるといわれる。渴を

訴える馬ならそれを自覚し、進んで飲んでもくれる筈であるが、そこに問題があり例にたとえるならば、秀吉流に飲ませてみせるという積極性もさることながら、今日における和牛の実態からみて、家康の心境にならない、自覚し、かつ進んで飲んでくれる時期の早く来ることを願わずにはおられない。

和牛界の現況に悲憤を感じてか、またこれを憂うるあまりか、お互の間でも少しば激論、極論が飛び出す今日この頃である。その論点は多頭飼育可否論はもとより、これに対する少数優秀飼育論、さらには一貫経営是非論と展開する。これらは決論らしきものを得ないままに終始することしばしばであるが、他に和牛ポリーナス論なるものがある。

これは現在の阿新地域の農家経営の中で、マヤあり、草あり、また老いたりはいえ人手もあるという和牛飼育において、大くは望めないにしても、生産子牛の販売収入は、あたかもサラリーマンのポリーナスにも匹敵するというわけであるうか。

また牛を飼うことを一種の投資と考え、子牛の販売収入を配当にも等しいものととえるなど、強いて現状に甘んじる傾向の現われか、それとも宿命的慣行観念

の現われであろうか。直接関係の深い牛価についても、その高低に一喜一憂する層と、対称的に案外平然と構えるアキラメムードの層に大別され、また生産農家にとつて、関心事である畜の価格安定制度についても、共通して案外反応を示さず、関係者の必死の説得に対しても、進んで恩恵を受けようとする者が多いと聞く。こうした人達の中には、和牛の将来性を見極めたかのように、和牛カズノコ論を支持する者もあり、考えさせられるものがある。

山陰では、弁当を忘れても傘を忘れない言葉があるほど雨が降り、山陰に近しいか、近頃雨を気にするようになった。だからといって雨にことよせて、強いて湿っぽい話をするわけではないが、現在の和牛飼育において、一戸平均二頭程度の小規模では採算のとれないことは百も承知であるが、しかし牛を飼うことによって、農家へもたらす利益は貴重なるものがあるという。その収入はたとえ「霧雨のような細雨であっても、濡れることもでき、また潤いもする」という。この心情は尊いといつてよいか、哀れといおうか。

昨今の和牛界を天候にたとえるなら、遺憾ながら好天に恵まれたとはいえず、少なくとも生産地においては、小雨模様

の状態かも知れない。この湿り勝ちな様相から早く脱し、快晴を求めぬ気持ちは誰しも同じであり、そのためには、お互いの努力が肝要であるといえは一言につきるが、その道は遠く、また険しい気がしてならない。しかし千里の道も一歩からのとえの如く、牛歩といえども堅実にさらさら進めたいものである。そこにおけるお互いの心構えこそ重要かと思う。和牛経営における心構えとは、計画目標を達成するために、欠ぐことのできない事項を、事前に十分検討し、かつ逐次実行に移すこと、要は万全の備えをすることである。かつて聞いたことのある話から、心に残るものを引用して、心構えの重要性について強調したい。

越後の国といえは今の新潟であるが、そこに鈴木牧之という天文学者があつた。著書に「北越雪譜」があり、天保年間(一三〇年前)の発行と聞く。この人は天文学に明るく、また信望の厚い人であるだけに近所の人が、朝出かける時に空を気にして、「今日の天気はどうでしょう」とたずねると、長年この道にあつても「お天気というものは、わからないもので、心配でしたらお持ちになったほうがよいでしょう」と、傘を持つようすすめたという。たとえ雨が降らず、持った傘が邪魔にならうとも、持たずに雨を心配する心の負担を考えたら、傘を持つという心構え(心の用意)こそ必要で

あるというもの。また千の利久といえは、言わずとも茶道に、この人ありと知られている。この人がお弟子さんに茶道の訓戒として、「雨降らずとも、傘用意」といつて論しておられる。雨に濡れては、濡れた本人はもとより、居合わす他人も不快であり、お互いに心の平静を失うようでは、お茶の心に反するものであり、常に心するよう平素の心の用意を論されている。

芭蕉の句に、「とうとさや、雪降らぬ日も、簑と笠」という一句がある。これは案山子のご苦労をうたつたものであるが、これも用心のよさが秘められた句である。さて一旦有事の際、真に頼れるものは自分自身の力以外になく、その力こそ平素の心構えによって蓄えられるものである。現に和牛界にも、その有事の兆が現われつつあるのではなからうか。この際あえて心構えについて、強調するものがあり、用心のよさは決して小心を意味するものではない。現状に甘んずることなく、明日への飛躍を期し、常に心の用意を怠ってはならない。

「治について、乱を忘れず」「備えあれば、憂いなし」言葉こそ古いが、教えは重く尊いものであり、これが今の和牛界に強く望まれるもののように思われる。

十一月号目次

この頃思うこと

..... 国定登幾雄 1

◇ 鶏 試

秋ピナの特性と飼養管理 村田武久 4

◇ 酪 試

飼料作物の生産と利用②
暖地型飼料作物について 和田信良 7

診断事例①

高度経済成長にゆさぶられた酪農 11

後継者研修生報告(二) 15

公共育成牧場検討会報告 2

和牛繁殖育成センターの公共性と存在意義

中国四国ブロック畜産コンサルタント研究会より

これは、岡山県畜産公社の奥津繁殖育成センターを対象として、岡山県畜産会が、中国四国地方の各県畜産会および関係者を集めて十一月五日六日に上斎で行なった中国四国ブロック畜産コンサルタント研究会において、繁殖育成センターに対して提出された助言のなかから経営部門をとりまとめたものである。

全国九〇数カ所にある和牛繁殖育成センターのどこをみても、累積赤字をかかえてその経営に四苦八苦している。この赤字経営をうんぬんする前に、まず公共育成牧場の公共性、あるいは意義というものについて検討する必要があるだろう。公共育成牧場、あるいは繁殖センターというものの意義を簡単にいえば、優良家畜を生産し地域内に配布する。また、農家が行いにくい育成を大規模な草地を利用してこれの肩替りをして、地域畜産の発展のためにつくすということになるだろう。

しかし、これの運営を考えた場合、職員として派遣されている者、あるいは出向している者にとり、毎年赤字が出ることは不評をかうものとなり、現場で汗を流し、ある場合には危険な仕事までも行っている者にとり、これは大きな苦痛なのである。ただし、これらのものは上から規格をきめて与えられた経営であって、経営をまかされた者が自由にできる性質のものではない。

岡山県畜産公社の奥津繁殖センターの場合をみても、すでにかんがりの累積赤字をかかえており、また改善のために立てられた計画でもまだ赤字生産をくりかえすことになる。補助金を含めて、一頭当たり七〇万円の施設費、補助金を除いても四〇万円からの施設費では、現在の和牛子牛生産経営ではとてもこの赤字を解消することは不可能であると考えられる。こういった状況で、経営の赤字について検討することは無意味とさえいえるのではない。職員は各方面からの助言をきき、それを取捨選択し最高の技術でもってこれにあたらなければならないのは当然で、すでにこれは、例えば草地の運営とか飼養管理については相当高度の技術が発揮されている。そして出る赤字は最小にしたいとめなければならぬが、それでも出る赤字は、公共性のもとにある一定のきめられた方向で進められるかぎり、この赤字は、当然国なり県なりが代替すべきと考えられる。

この赤字を少なくするために、和牛の一貫経営を取り入れたらどうか、また肥育部門を取り入れたらどうかという意見もあるが、それでは繁殖センターというもののおかれている社会的意義はなくなってしまわないだろうか。赤字経営でも、繁殖センターを存続させるための社会的意義が確立されなければいざり、

岡山県畜産会保有 畜産映画招介

酪農

- ・酪農経営の改善
- ・乳牛のエサと栄養障害
- ・山地酪農にいどむ
- ・上手な牧草の作り方とその利用

肉用牛

- ・牛の栄養と消化
- ・肉用牛の生理と栄養

養鶏

- ・成功する養鶏経営
- ・養鶏経営の改善
- ・鶏の生理と伝染病

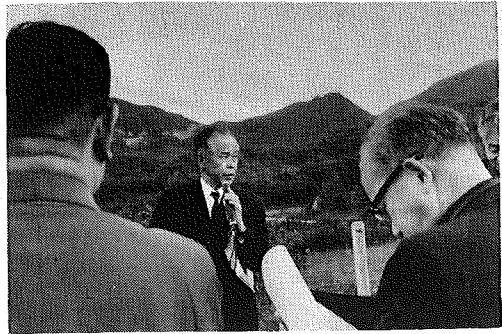
衛生

- ・放牧牛の衛生
- ・牛・豚・鶏の衛生

貸出料 一回 一、〇〇〇円
 申込先 岡山市下石井二一六一四五
 社団法人 岡山県畜産会
 TEL(〇八六) 二二一八五七五

経営面での改善策を作成することは極めて困難なことである。そういった面が確立されておらず、また畜産を取りまく社会情勢が急激な変化をみせている現況のなかで、全国九〇カ所のこれらの牧場は、悪くいえば、生体実験にかけられているといっても過言ではない。これでは、経営をまかされている者にとり、いくら非難されようとも責任の取りようがなく、仕事をやる意義もまた見出し出されない。

岡山県畜産公社の繁殖センターの場合でも、これだけの償却費がかかる状況でいかに努力しても無意味かとも思われる。それでも子牛生産経営をうんぬんするのなら、現在の考えをバラバラにして、市



概況を説明する畜産公社石井局長

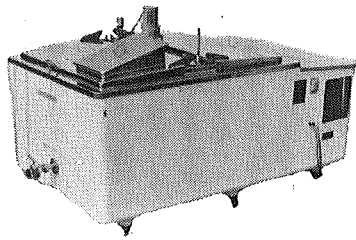
場の平均価格が和牛子牛一頭八万円なら、いかにすれば八万円生産できるかという出発点にもどって考えてみる必要があるだろう。それもできないのなら、岡山県畜産公社の公共性を考える必要がある。その一つは、大規模未利用地を用いての企業的経営の実験的要素である。これは行ってみるべき価値が十分あるのであるが、採算を考えるとそれは無理である。うから、当然その肩替りは構成団体が負担すべきである。実験的要素とあわせて、草地管理技術とか飼養管理技術の展示要素である。これらはすでに十分示されている。

もう一つは、優良牛の県内、あるいは地域内保留という点である。いかに優良牛といえども、市場に出された場合は他県に買われたり、ある場合には肥育に廻されてしまう場合もあるだろう。また、農家が飼っている優良牛から生まれたよい子牛も、その農家の都合や周囲の状況によっては他に出してしまうことになる。これらを公社が買い上げ、育成して初妊牛として、そしてしかるべき農家に払い下げるといった方法をとったらどうか。

最近の子牛市場をみると、雌子牛がヌキより安くなった時が最低値であるという様相を示している。それを購入して初妊牛まで育成する間には、一〇数カ月あるから、その間には値上りも期待でき、有利性もあるのではなからうか。

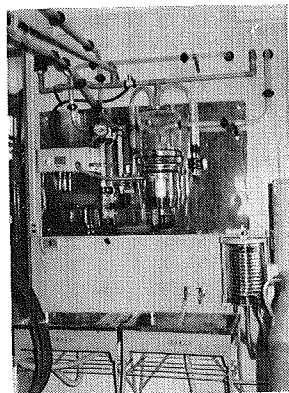
共に前進！技術のオリオン

バルククーラー



米国3A衛生規格をはるかに上回る高性能アイスバンク方式ですから非常に経済的しかも超高級樹脂F.R.P樹脂を採用しておりますので断熱効果が抜群、絶対錆びません。

パイプミルカー



他に類のない特許の自動洗浄装置
 多量の水とスポンジが循環し、パイプ内は常に衛生的、操作も簡単でオリオン独特のアイデアがここにも生かされております。

バーンクリーナー



省力化に大いに貢献する自動糞出機
 錆びないエレベーター、安全装置のローラーピン、耐久力のすぐれたチェーンなど数々の特長を持っております。



オリオン機械株式会社

本社・工場 長野県須坂市大字幸高246 TEL(5)1230
 営業部 東京都渋谷区代々木1-37-20 TEL(379)4156
 岡山出張所 岡山市柳町1-1-17小六農機内 TEL(24)0300

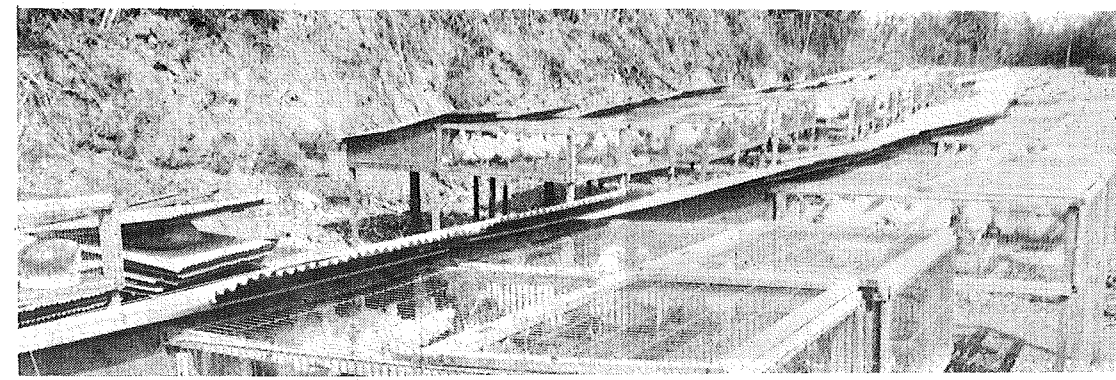
営業品目	ミルカー	ウォーターカップ
	ユニットクーラー	スタンション
	デンサク	電動攪拌機

小六農機株式会社 岡山市柳町1-1-17 TEL(24)-0307(代)

養鶏試験場だより

秋雛の特性と飼養管理

業務部長 村田武久



養鶏産業の近代化に伴い、経営規模の大型化、育雛設備の改善、飼料・薬品の進歩、鶏の性能ならびに育雛技術の向上などによって、周年餌付けに移行する現状にある。

すなわち、昭和四十四年の月別餌付け羽数をみると、年間の総計は約一億四、一〇〇万羽で、そのうち、前半（一～六月）が五八％、後半（七～十二月）が四二％を占めており、秋雛（九・十・十一月）は二二％の餌付けであり、周年餌付けにつれて、逐年、秋雛の餌付けが増加の傾向を示している。つきに秋雛の特性（長所・短所）と、飼養管理の要点について述べる。

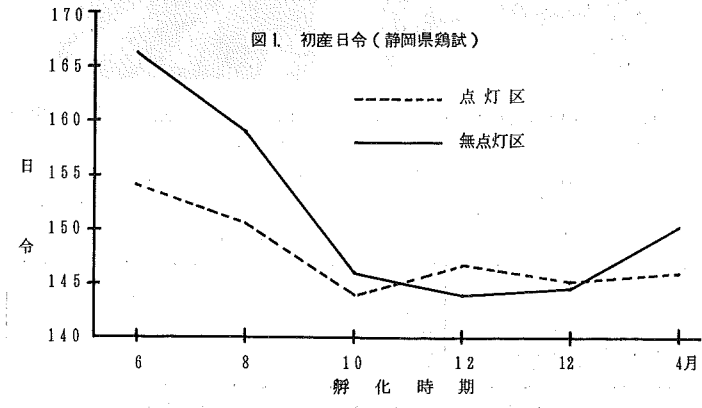
一 特性

1. 長所

- (1) 育雛がしやすい
九月の声を聞くと、県南ではまだ残暑がきびしいが、県北では朝夕は秋風がそよぎ始め、彼岸前後ともなれば、気候的にも温暖で保温が楽であり、春についても育雛のしやすい好季節となる。
- (2) 素質の良い雛が入しやすい
一般に秋雛を生産するための種卵は、春雛を生産した後の素質の悪い種卵は自然に淘汰され、その後の産卵持続性の高い種卵より生産されるので、能力の高い雛が多い。

2. 短所

- (1) 初産日令が早く、小雛・小卵になりやすい
(ア) 初産日令
従来秋雛は、孵化月日が遅いほど早く産卵すると言われてきた。すなわち、秋雛は、大雛期から若雛期にかけて、じた



いに日長時間が延長するため、性成熟が早まってきて、春雛では逆の傾向にあることが知られている。

静岡県鶏試の試験成績によると、初産日令は図1のとおりである。

この試験は、孵化時期を別にした卵用鶏の能力を調査したもので、一九六五年二月以降一カ月間隔で孵化した白色レグホン種のコマージュル種で、その種卵は同一鶏群のものである。

なお、点灯区は二一日令より一四時間間の周年照明（四〇Wの白熱電球により鶏の位置で一〇～四〇ルクスになるよう、朝夕にかけて必要な時間点灯）を行なった。この試験においては点灯区の初産日令は比較的接近しており、もっとも遅い六月雛と最も早い十月雛の差は九・四日にすぎなかったが、無点灯区においては差が大きくもともとも遅い六月雛と最も早い十月雛との差は二三日であった。

また、山田等は、卵用鶏の生産形態におよぼす孵化時期の

表1 初産日令・卵重・体重（秋田畜試）

ふ化時期		4月	6	8	10	12	2
初産状況	日令	187日	187	176	154	144	154
	卵重	3.99g	4.40	4.38	3.65	3.86	3.71
	体重	1.693g	1.729	1.746	1.663	1.575	1.729

影響については試験を実施し、初産日令は夏至に近く孵化された鶏群がもっとも長く（六月孵化、一七七・六日）、冬至に近く孵化された群においても短かった（一月孵化一五三・八日）。そして、同一父母から生産された雛においても、孵化時期の相違により、二〇～二五日程度の初産日令の差を生ずると報告しているが、前述の静岡県鶏試と同様な傾向を示している。

(4) 初産体重・初産卵重
多くの試験成績において、初産体重・卵重は、初産日令と同様の傾向を示している。すなわち、初産日令の早いものほど初産体重・卵重は小さい傾向がある（表1参照）。ただし静岡県鶏試の試験においては、初産体重のみは、孵化時期別にも点灯・無点灯別にも大差がなく、従来の成績と異なっているが、これは鶏の銘柄などの差によるものであろう。

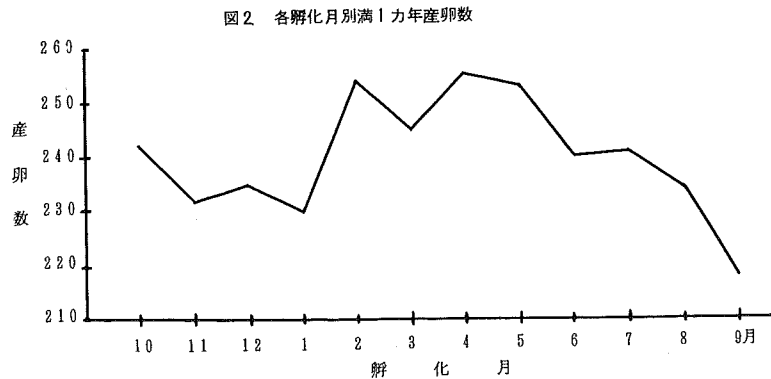
表2 鶏卵価格（1Kg 当り円）

年次	42	43	44
1	194	221	169
2	201	241	181
3	197	225	206
4	166	182	176
5	147	177	159
6	146	159	162
7	154	160	151
8	188	174	160
9	203	201	181
10	209	211	199
11	212	208	185
12	246	211	208
年平均	189	186	181

注) 全販大阪支所一級高値

(2) 初産時期が春の卵価格の時期になりやすい。
春は一般に卵の生産量が多いため、年間平均より卵価安の年が多い（表2参照）。なおその上に、秋雛は三月頃より初産期に入り小卵の生産も多いので、販売上不利のばあが多い。

県内においては、九月中はかなり蚊の発生を認めるところも多く、蚊の吸血による発育不良・媒介による鶏痘の被害を受けやすい。また、晩秋雛においては、翌年五、六月頃鶏痘の被害を受ける心配も多い。



二 飼養管理の要点

(1) 秋は天高く馬肥ゆるの好季節で、保温が容易であり、育雛がしやすい点は、確かに長所である。しかし、県南においては九月中旬は気温が高いため、育雛舎内が換気不良となり、発育不良などの弊害が起きやすいので、換気扇などを設置して十分換気をはかる必要がある。

また、平飼いの場合、廃温時の雛は十分注意し、気温低下のため雛が密集し圧死を生じないよう予防対策をたてる必要がある。

(2) 秋は逐次気温が低下するため、育雛舎内の保温にとられやすく、往々にして、密飼い・換気不良となりやすい。このため、発育に応じた適正床面積を占めるよう薄飼いにとめるとともに、舎内の換気に十分注意する必要がある。

(3) 秋雛は短所の項で述べたように、初産日令が早く、小雛・小卵となりやすい傾向があるので、これらの点を改善するため光線管理や制限給餌を行う必要がある。

(7) 光線管理

山口県種鶏場においては、同一種鶏群から採取した九、十、十一、十二月孵化の白色レグホーン種について、開放鶏舎における育成期、成鶏期を含めた一連の光線管理の試験を実施している。

試験区は二区分とし、照明区は二二週令時の日長時間に点灯四・五時間を加えてこれを餌付けより四週令まで設定し、五週以後毎週一五分あて漸減し、一六時間到達後は五〇〇日令まで一六時間一定とした。これに対し対照区は二二週令まで自然日長下で育成し、その後は照明区と同一である。

主な結果はつぎのとおりである。平均初産日令は各孵化月とも照明区が対照区に比し、いずれも遅くなり、その差は一七・〇―一九・四日であった。一五四日令体重は十一月孵化を除き、他の孵化月はいずれも対照区に比し照明区の体重が軽く、総平均では照明区一、六六六三グラムであったが両区とも順調な発育を示した。卵重の増加をみると十、十一、十二月孵化の卵重は照明区が対照区より重く、性成熟の抑制による効果が明らかであらわれているが、九月孵化の卵重は相反する成績であったが、その原因については不明であった。

産卵率、産卵指数については、照明区対照区に有意の差は認められなかった。経済性すなわち、

は、九、十一月で

対照区がすぐれたが、十、十二月および総平均の成績では照明区がすぐれた(一羽当たり粗利益は照明区は六九七円、対照区は六六三元)。

(4) 制限給餌

卵用鶏においては、育成期に適切な制限給餌を実施することにより、性成熟を抑制し、初産卵重を高め、産卵の持続性を向上し、経済性を高める目的で研究が進められている。本年度より岡山、鳥取、熊本など中・四国、九州の八か所の養鶏関係試験場が共同研究として、国の助成を得て、春、秋雛の二グループにわかれ試験を開始しているので、その成果が期待される。

(4) 秋雛の中・大雛期は十二月―二月の厳寒の候を過ごすため、ひどい寒さのストレスを受け発育不良となりやすいので、防寒対策には十分注意すること。

(5)

秋雛の産卵率は春のピーク時を過ぎ、逐次下降の傾向をたどり、梅雨期・盛夏の候に入る。この時期は産み疲れが生じやすいとともに、飼育環境不良のため、産卵率が低下しやすいので、鶏舎の換気乾燥、防暑対策、ケージ管理のばあいは特に夏季の軟水様便対策など、飼育環境を良くするように努力する必要がある。

三 むすび

卵用重・採卵養鶏を問わず経営合理化の理由から、従来の春秋二回の育雛から周年育雛へと移行しており、秋雛の餌付けも多くなる傾向にある。

秋雛は春について育雛がしやすく、素質のよい雛が入手しやすいなどの長所を持つているが、またその反面、性成熟が早く、小雛・小卵になりやすく、産卵持続性が劣るなどの欠点を持つている。このため飼養管理技術の改善、すなわち、光線管理・制限給餌・衛生管理を適切に実施し、秋雛の経済性を高めるよう努力することが大切である。

酪農試験場だより

飼料作物の生産と利用 (2)

暖地型飼料作物について

技師 和田信良

畜産による所得の増大を図るには、家畜の飼養頭数を増すと同時に飼料の自給度を高めることであり、そのためにはできるだけ省力的に多くの収量をあげなければならぬ。今まで栽培されてきたトウモロコシ、ソルゴー、イタリアンライグラス、エンバクなどの一年生作物とくらべ、それと同等もしくはそれ以上の収量が確保されるならば、一度播種しておくとも三―四年利用でできるような多年性牧草の栽培が望ましい。

そこで、オーチャードグラス、ケンタッキー三一フェスクなどの北方型牧草は、春秋は多収されるが、夏季においては夏枯れをおこして利用不可能となる。そのつなぎに暖地型牧草を導入し、夏季に

おいても牧草を給与できる自給飼料体系が必要である。

酪農試験場でも暖地型牧草コースタルパニクグラス、パビアグラス、ローズグラス、パニクグラスなどを導入し試験研究を実施しており、その適応性を検討している。

パニクグラスは、熱帯亜熱帯を通じて世界各地に自生が見られ、南方における最も重要な永年牧草であり、現在では温帯各地にも自生している。匍匐枝、地下茎および種子によって繁殖し、草丈二〇―五〇cm内外で、生育年限は長い。十分な水と肥料があればあらゆる型の土

壤に生育するが、砂質土壌より粘質土壌を好む。停滞水には弱く排水をはかることが大切である。また土壌酸性、にも強く耐旱性もあるが、あまり乾燥すると収量は低下する。高温を好み平均気温二四℃以上でよく生育するが、一五―一八℃ではほとんど生育を停止し、二―三℃では茎葉が枯死する。放牧用に適し、窒素肥料の効果が高い。

パビアグラスは、西インド諸島および南アメリカ原産の暖地型牧草である。草型は中間型で、太く短い匍匐茎を出し、土壌緊縛力がきわめて強く、一度定着すると他の牧草との混生は困難となり、単一草地になりやすい。窒素肥料の効果が大であり、耐旱性も強く、放牧用に適しとくに地力の低い土壌における草地利用に向いている。

ローズグラスは、南アフリカ原産の牧草であるが、わが国では無霜地帯以外は普通越冬できなく一年生である。最近各地で栽培が広まっており、草丈九〇―一〇〇cm前後で茎は細く、葉はきわめて多く、匍匐茎を有しその分節から発根する。湿潤な土壌を好み、耐旱性も比較的強く、またアルカリ土壌にもよくたえる。

パニクグラス(Panicum)は、茎は細いが倒伏に強く、四―六回の多刈りが可能で、多肥すれば、一〇アル当り一〇トン以上の収量があり、機械利用にも適するので新しい夏作物として最近話になってきた。ローズグラスとソルゴーの中間の草型であり、一般に耐旱性が強く、家畜の嗜好性もすぐれて青刈利用として好適といわれているが、乾草としても利用できる。

草種も多く種類としては、ブルーパニクグラス、ジャイアントパニクグラス、バルブパニクグラス、カラードギニアグラス、キニアグラス、クローラーグラス、スイッチグラスなどがふくまれる。本来は多年性であり、我が国でも暖地ではブルーパニクグラス、スイッチグラスなどは越冬し、カラードギニアグラスも系統によっては越冬するものもあるが、その他の種はほとんど越冬はむつかしい。株は立毛で、成熟期の草丈は一、五―二、〇mに達し、一株から数十本の茎を生ずる。土壌に対応性が広く、乾燥にもよくたえ、酸性土壌にも強く、肥沃地を好む牧草である。

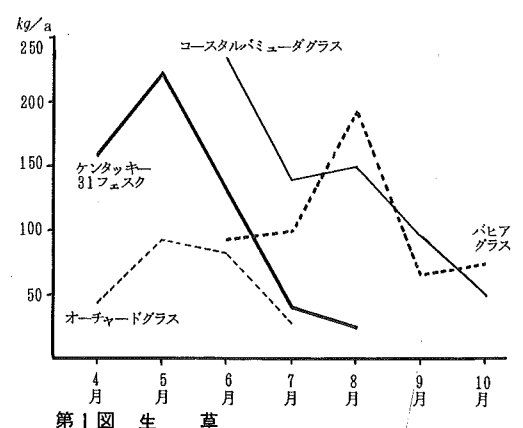
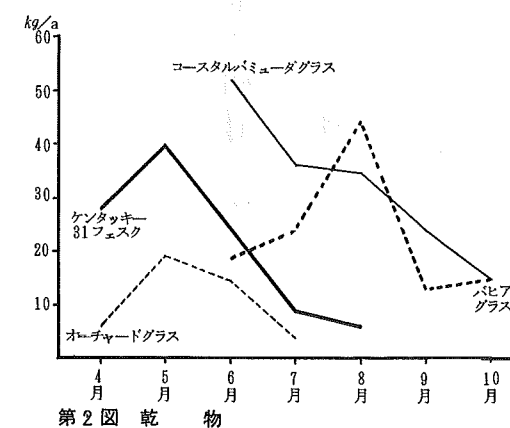
以上これらの暖地型牧草についてのべたが、当場において試験を実施した概要はつぎのとおりである。

1 コースタル
バミューダグラス、
パビアグラス
の時期別生産

第1表 刈取期別乾物収量 (Kg/a)

区名	刈取別	1番刈	2番刈	3番刈	4番刈	5番刈	6番刈	7番刈	8番刈	合計	比
コースタルバミューダグラス		302kg	220kg	172kg	186kg	160kg	207kg	229kg	163kg	1639kg	100
パビアグラス		181	237	178	241	137	161			1135	69
ケンタッキー31フェスク		280	208	94	89	118	101	88	69	1047	64
オーチャードグラス		74	75	63	54	77	83	62		488	30

北方型牧草であるケンタッキー31フェスク、オーチャードグラスを対照に、夏季高温に適するコースタルバミューダグラス、パビアグラスをもちい、主に放牧を目的とし、刈取量性を検討した。その結果について刈取期別乾物収量をみると第一表のとおりである。また年間の生草、乾物の時期別生産を図示すれば第一図、第二図のとおりである。



以上の結果からみると、春季には北方型牧草、夏季には南方型牧草が高い収量を示しており、現在多く栽培されているケンタッキー31フェスク、オーチャードグラスなどの牧草が生産停滞をおこし、生産量が減収する夏季に暖地型牧草を導入し自給度を高めることが可能である。

2 ローズグラスの
利用目的別収量試験

利用目的別すなわち放牧目的区は草丈三〇cmごと、青刈目的区は草丈七〇cmごと、乾草目的区は出穂もしくは草丈二二〇cmごとに刈り取り、その生草、乾物収量を調査した結果は第二表・第三表のとおりである。

このように、放牧目的区は六月二十一日、青刈目的区は六月二十七日、乾草目的区は六月八日に一番刈りをおこない、夏季高温時、在来のケンタッキー31フェスク、オーチャードグラスなど北方型牧草の生育停滞時に逐時利用できた。

3 パニックグラスの
収量比較試験

パニックグラスの品種別(ブルーパニックグラス、バルブパニックグラス、カラードギニアグラス)「ズルランド、モロ

ッコレ、ギニアグラス「グリーンパニック」の生草収量および乾物収量を比較検討した概要はつぎのとおりである。

刈取期別生草乾物収量は第四表のとおりである。

このように各品種間の収量差は明らかに認められ、カラードギニアグラスが最も多収で、ズルランド、モロッコも有望であったが、この成績では低収量であり、参考までに四国地域における夏作物の比較試験例をみると第五表のとりの成績がでている。

パニックグラスは多収で機械化栽培にも適することから、四南暖地の飼料作物として期待される作目で、岡山県における地帯別適応性、栽培基準、家畜の嗜好性など十分検討する必要がある。また夏季高温時に刈取りができ、夏枯れ対策にも有望な牧草とおもわれた。

おわりに問題点としては、これらの牧草は一般に発芽がわるく、播種期間が比較的に遅く、初期生育期間が梅雨にあたり、日照不足と低温により生育が停滞する点などである。

これらについては目下試験研究中であるが、さしあたる対策として、播種適期をまもり、踏圧をよくし、放牧用、青刈用、貯蔵飼料用と利用区分を明らかにして栽培管理をすることが大切であろう。

世界の酪農界で大反響! 乳牛の健康を守る QMシステム

カウペットラインミルク

原乳冷却と貯蔵のきめて クイック・クーリング・システム

バルククーラー

—アイスバンク方式—
冷却効率がきわめて高く、すでに各地の公式テストでも記録的な好成績を納め、その性能が実証されております。操作はすべて自動式冷却、貯蔵、集乳作業の省力にもいちじるしい効果を発揮します。(540ℓ・1080ℓ・1800ℓ)

〈QMシステム〉は安全第一を主眼とし「前後の脈動比率」と「吸引と休止の比率」は世界に例のない画期的なもので梅沢の技術がこれを完成し得たのであります。皆様方に安心してご愛用願える確信ある製品であります

- ◆搾乳時間25%短縮
- ◆搾乳量5%増加
- ◆前後同時に搾りきり
- ◆安全搾乳で牛体を守る

酪農機総合メーカー

株式会社 梅沢製作所 株式会社 藤井酪農器商会

本社工場 東京都江戸川区松江2-15-9 電(652)7511代
群馬工場 群馬県甘楽郡甘楽町916 電富岡(2)3141代
営業所出張所 札幌・帯広・盛岡・熊本・宮崎・岡山・半田・豊富・浜頓別

岡山市春日町4番13 郵便番号 700 電話 (24) 3268

ヒド

高圧スラリーポンプ
大型スプリングクラー
(水洗式糞尿散布装置)
設計・施行

真備町 布引牧場(下)

メーカー 中央機器製作所

TEL 24-3268
藤井酪農器商会
岡山市春日町4-13

高度経済成長にゆきさらけ酪農

県南水田地帯のある酪農家の場合

社団法人 岡山県畜産会

最近出された統計(四十五年二月一日現在)では、岡山県下の農家戸数は一五万を割り、しかも専業農家戸数は一〇年前の昭和三十五年の三分の一以下の一万九、四五〇戸に減少している。反面、兼業農家は大中に増加し、農家全体の八七%を占め、第二種兼業農家の増加もはげしい。もっとも、四、五反の飯米程度し

最近、労働者を満載した小型マイクローバスによくであう。特に、朝夕の通勤時間帯には岡山県下の津々浦々いたるところでゆきあう。それもひどい時には四台も五台もつらなっている。バスの中をみると、ご婦人はもとより、相当ご年配の人も乗っている。農繁期に入ってもあまりかわりはない。小型コンバイン等の機械を導入し、すばやく取り入れをすまして稼ぎにでたり、はげしい人は夫婦そろって昼間は稼ぎにゆき、帰って暗くなると、ライトをつけてコンバインで収穫している。省力化のための機械化ではないのである。出稼ぎを続けるための機械化である。また、それだけ現在の企業は労働力を要求していることでもあらう。となりの家は、夫婦そろって稼ぎにゆき、毎日現金を六千円も八千円ももって帰るなどの話をきけば、動揺せずにはおれないだろう。また、新聞誌上には、来年の高校新卒者の初任給は四万、いや五万だろうと報道されており、これでは農家に後継者が残らないのもあたりまえといえよう。

経営条件

農業従事者	4名
水田面積	178a
飼料専用坪	28a
“(借)	20a
乳牛頭数(44)	成13・育3
“(45)	成7・育4
成牛1頭当り粗飼料	5,253kg
“(濃厚飼料)	2,753kg
“(濃厚飼料)	9,2106円
経産牛1頭当り乳量	4,109kg
F M 率	51.1%
養分給与率 DCP	13.45%
“(TDN)	93.6%
成牛1頭当り管理時間	162時間
牛乳100kg生産費	4,342円
成牛1頭当り所得	9,5374円
所得率	47.1%

(44年度の数字)

になり、乳牛の青ものは不足を来たし、乳牛の生理をもそこなうばかりでなく、家族の健康までそこなう結果となった。おのずと濃厚飼料依存度が高まり収支は黄色からだいだいへ赤字へと向った。また、多頭化すれば乳牛へ労力をとられる

作っていない農家を、はたして農家といえるかどうかは疑問である。このような情勢は県下全域に及んでい、特に県南にはげしく、主幹労働力が常に必要な酪農経営にあつては、きびしい現実である。更に米価の二年据えおき、乳価の低迷、ふん尿による環境汚染といった問題をかかえては、その不安はかくせない事実である。西大寺、邑久といえ、岡山県の酪農発祥の地であり、以前は優良牛の産地として、共進会などでも上位を独占したものであつたが、今はもっとも難しい地帯となつてしまつた。

ある酪農家をAさんとしよう。Aさんの経営条件は表のとおりである。水田に囲まれてはいるが、水田はまたまつており、転換畑にもしやすしい、また吉井川の旧河川敷ももつており、酪農経営を行うには比較的恵まれてゐる。それで二、三年前までは、水稲プラス乳牛の複合経営で、米価、乳価の毎年の上昇とも相まって、周囲でも高所得農家であつたのである。しかし、第二次、第三次産業の高度成長につれて、農業との所得格差はひろまり、それをうめるために酪農でも多頭化が叫ばれ、Aさんもその方向に進んだ。だが、ここに問題ををはらんでいた。少頭数の時は若干の裏作と、夏季のアゼ草刈りで十分こと足りたが、多頭になるにつれ、青刈り給与では極めて多量的になり、乳牛の青ものは不足を来たし、乳牛の生理をもそこなうばかりでなく、家族の健康までそこなう結果となった。おのずと濃厚飼料依存度が高まり収支は黄色からだいだいへ赤字へと向った。また、多頭化すれば乳牛へ労力をとられる

第2表 生草収量 (kg/a)

刈取期 区名	1番刈	2番刈	3番刈	4番刈	5番刈	6番刈	7番刈	8番刈	9番刈	10番刈	11番刈	計
放牧区	120	117	49	36	54	72	41	63	41	92	37	722
青刈区	223	132	164	214	152	150						1,064
乾草区	422	170	260	162								1,014

第3表 乾物収量 (kg/a)

刈取期 区名	1番刈	2番刈	3番刈	4番刈	5番刈	6番刈	7番刈	8番刈	9番刈	10番刈	11番刈	計
放牧区	14.5	14.8	7.8	5.7	8.1	11.4	5.4	10.8	7.6	15.0	6.2	106.8
青刈区	29.4	18.9	22.6	27.8	27.3	25.2						151.2
乾草区	53.5	26.0	46.5	27.8								153.8

第4表 収量 (草丈=cm 収量=kg/a)

品種系統名	刈取回数 区分	1番刈				2番刈				3番刈				4番刈				合計		
		草丈	生収	草量	乾収	草丈	生収	草量	乾収	草丈	生収	草量	乾収	草丈	生収	草量	乾収	生収	草量	乾収
ブルーパニックグラス	91.2	24.0	3.8	82.6	40.0	9.0	107.0	68.0	113.47	—	—	—	—	—	—	—	132.0	26.2	(31.3)	(35.9)
バルブパニックグラス	45.8	18.0	2.7	103.1	84.0	13.4	84.2	112.0	21.8	88.2	120.0	2.23	—	—	—	—	334.0	60.2	(79.2)	(82.6)
ズルランド	45.7	38.0	4.8	102.6	140.0	19.3	80.5	120.0	25.2	90.2	124.0	2.36	—	—	—	—	422.0	72.9	(100)	(100)
モロッコ	77.4	36.0	4.8	95.9	100.0	13.4	82.5	128.0	25.1	78.2	132.0	2.48	—	—	—	—	396.0	68.1	(93.8)	(93.4)
グリーンパニックグラス	41.5	20.0	2.9	103.1	64.0	9.8	75.7	116.0	26.3	81.1	140.0	2.56	—	—	—	—	340.0	64.6	(80.6)	(88.6)

注 ()内はズルランド種の収量を100とした場合の比較

第5表 四国地域における夏作飼料作物の比較 (1968)

試験場所	草種	品種または系統	播種期 (月日)	最終刈取期 (月日)	刈取回数	生草収量 (kg/a)	同左比率 (%)	備考
	カラードギニアグラス	モロッコ系	5.15	10.16	6	1462	101	転換畑
	Panicum SP.	〃	〃	〃	6	863	60	
	ローズグラス	ガンソン	〃	〃	7	1447	100	
香川農試	カラードギニアグラス	モロッコ系	5.1	10.25	5	1387	102	転換畑
	Panicum SP.	〃	〃	9.6	4	990	73	
	ソルゴー	レッキス	5.15	11.12	3	1442	106	
徳島農試	カラードギニアグラス	モロッコ系	5.15	〃	5	820	140	転換畑
	Panicum SP.	〃	〃	〃	4	447	76	
	ソルゴー	ガンソン	6.15	〃	3	457	78	
高知畜試	カラードギニアグラス	モロッコ系	5.15	10.8	4	773	114	普通畑
	Panicum SP.	〃	〃	9.17	4	330	49	
	ソルゴー	ハイブリッド	〃	10.22	3	1301	191	
愛媛農試	カラードギニアグラス	モロッコ系	5.24	〃	5	680	100	
	Panicum SP.	〃	〃	〃	4	960	121	普通畑
	パビアグラス	〃	〃	〃	938	119	(現地試験)	
	パビアグラス	〃	〃	〃	345	44		
	ダリスグラス	〃	〃	〃	428	54		
	ローズグラス	ガンソン	〃	〃	791	100		

注 カラードギニアグラスは晩生、Panicum SP.は極早生

ため、水稲の管理もおろそかになり、周囲の農家と反収が一俵も少なくなってきた。これだけで乳牛二頭分のもうけはほとんどしまつことになった。

更に将来を考えた場合、現在ではまだ周囲の兼業農家と対等に生活水準を維持できるが、毎年一〇%以上も給与が上昇するなかで、本人の努力だけで、この情勢についてゆくことができるかどうか、不安を持ったのである。周囲の人と話をしても、米の話や乳の話は話題にはのぼらず、話の中心は土地の値上りや労賃のことばかりである。また、周囲に同じよ

I 適正規模と多頭化への課題

四十四年は経産牛一三頭、育成牛三頭を飼養し、年間搾乳量五〇、三三八kgで、一日搾乳頭数九・四三頭、一日一頭当り平均乳量一四・六三kg、一日当り平均搾乳量一三八kgとなっている。これを年間平均乳価でみると、一日当り牛乳収入は六、八二四円、一kg当り生産費が43円42銭であるから差引一日当りの牛乳収入は一、二三三円となる。生産費中に含まれる一日当りの労賃は一、一〇一円であるから、一日の収入は二、三三四円となり、他産業に比べて遜色はない。

将来の労賃の上昇を見込み、これに見合う酪農収入を得るためには、一頭当りの乳量の増加と多頭化を考えざるを得ない。あなたの場合も単なる頭数の増加だけではなく、泌乳性の高い牛を揃えることが大切である。個体の乳量も大切であるが、群として乳量の揃ったものを増加し

ていくようにしなければならぬ。頭数の規模であるが、各種の統計を検討してみると次のようなことが考えられる。

- (1) 生産費から見た場合は一五・一九頭のところが牛乳一〇〇kg当り三、五八九円が一番低い。
- (2) 純収益を見ると一五・一九頭が五一、六五〇円と一番高い。
- (3) 一日当り家族労働報酬は三〇頭以上が三、八一円と高いが、その次が一五・一九頭で三、二〇四円となっている。
- (4) したがって、一応の目標は搾乳牛一五・一九頭くらいの線を考え、家族労力、自給飼料の確保可能数量ともらみ合わせて、計画されることが良いように思われる。

II 飼料管理部門について

(1)

現在の牛の栄養は中位であって、全般的には牛も揃っている。牛の体型、資質、乳器などから検討すると、飼養管理をよくすることによって乳量の増加が期待できる。

例えば乳房炎やケトosisが多発しているが、これは乳量に大きく影響するもので、この発生を防止しただけでも乳量の増加は可能である。

この二つの点については、基本的には舍飼であるため、運動不足、日光浴不足と、その上に実質粗飼料の給与量の不足、栄養分の不均衡等による体力不足、抵抗力不足に原因していると思われる点が多いので、牛の体力作りに努力されたい。

(2)

飼料の使い方を検討することが必要である。

一年間の購入飼料を見ると一〇種類もあり、自家配合の形態になっている。その結果を一日診断と年間飼料給与養分で見ると、いずれもDCPが過剰で、TDNが必要量を大きく下回っている。自家配合も原材料がいつでも入手できればよいが、入手困難で常に配合割合が変る場合は、そのつど養分計算をして、適正な配合をしなければならぬ。また配合には相当の労力を要するので、できれば内容のよく判った配合飼料を使つたほうがよい。

あなたの配合を見るとDCPが多くなっている。TDNが必要量を充足している、DCPが一五・二〇%くらい多くなっている場合はあまり大きな影響は表われないが、TDNが必要量を満たさないでDCPが過剰の場合はいわゆる低栄養、高蛋白となり、種々な障害を起し易い。例えば、卵巣の機能減退、抵抗力減退か

III 自給飼料部門について

南部水田地帯としては恵まれた立場にあるので、今後自給飼料の生産と利用を決意され、これを実行されれば水稲と酪農の二本立の経営は安定してくと考えられる。

(1) 自給飼料生産面積の増加

一頭あたりの飼料生産面積が八・五aであって、現在の各種の問題点はこれに集約されている。あなたの場合酪農を軌道に乗せる早道は、先ず水田裏作を十分に活用することである。昨年イタリアンライグラスを五七aを作付されているが、サイレージ利用は僅か四、〇〇〇kgであって、殆んど生草給与に終わっている。イタリアンの増反の他に青刈皮ムギ(早生坊主)などを更に一haほど省力栽培し、バインダーで刈り取れば四〇%程度の貯蔵飼料の確保は可能であって、一〇頭の搾乳牛に冬期間一日一頭あたり二〇kgくらいは給与できる。(水稲作は直播、苗まき、田植等の方法を裏作の収穫時期にあわせて使い分けること)また、この外にイタリアン

大豆粕、魚粉などのような高蛋白なものは使用しないほうがよい。またビール粕は、価格の面で水分含量の多いものは反って高くつくので、極力水分含量の低いものを購入すると共に、このような飼料は年間契約をして、常時使用するようになることが大切である。

(3)

現在青刈作物、野菜のある季節はよいが、サイロが無いため、冬期間が稲ワラ主体となり、夏と冬の飼料給与が大きくアンバランスになっている。これが大きな欠陥になっている。この点はぜひ改善を要する点である。

IV 経営部門について

(1)

将来計画の欄に「酪農を一本の柱としたいが、はたして将来有望なものかどうか

を圧迫しているように思われる。増頭計画があるので止むを得ないが、将来は成牛の耐用年数を延長し、育成牛の保有率を二〇%以内(頭数)に止めるようにされたい。

(2) サイロの増設

サイロが極めて不十分なので、裏作の増反と併せてその新設が急がれる。サイロはブロックの角型を併用すれば経費も安く便利である。サイレージ活用の利点としては、

- (1) 飼料作物の栄養価の一番高い時に刈り取りができるため、収量も多い。
- (2) 粗飼料の栄養価が常に一定している。したがって牛の状態により、濃厚飼料で給与内容の加減ができる。
- (3) 一時に貯蔵するため、一時的には労力を要するが青刈りよりは省力化される。
- (4) 一時に全部刈り取りができるため、後作を考えて作業ができる。機械導入

(3) 飼料作物の施肥量が不十分

昨年の実績から見ると、一般に反収が低い。畑作は厩肥と牛尿のみのようであるが、これのみでは作物栽培に必要な養分の適量を施用することができない。とくに磷酸が不足するので、作物自体の含有成分値にも影響があると推察される。

(4) 稲ワラについて

水田酪農にとって稲ワラは重要な飼料であるが、今年の夏、牛乳のBHC残留が大きな問題となり、その元凶として稲ワラが攻撃された。しかし、今年の八月からはBHC農薬は水稲にいい使用禁止となっているため、本年産の稲ワラはあまり影響はなく、残留BHCも低下するものと考えられるので、これの有効な利用を行うべきである。

か」の質問事項がある。しかし、つまるところは経営主としての情勢判断と、それに応じた経営方針の決定、そして目標達成のための努力、といった経営主体の態度の問題で、むしろこちらから質問してみたい問題である。

参考意見をいうならば、正直のところ酪農の将来はバラ色であるとはいえない。それは、経営が近郊に立地し、農業労働事情が悪く、しかも酪農条件の良否にかかわる粗飼料生産基盤としての耕地条件が水利慣行に制約されて、飼料確保、糞尿処理など基本問題の解決の困難があげられるからである。

しかし、このことから直ちに酪農経営は成立しえないと結論するのは早計である。兼業はさておき、専業農家を想定し、耕地規模拡大が簡単でない事情を考え合せるとき、農業経営の発展方向は酪農、果樹、やさいなど、水稲より集約な作業を加え複合化するか、あるいは集約作業の規模拡大など、内延的に規模拡大するしか方法はない。その場合、果樹ややさいが果して酪農よりよいかどうかである。基本的な基盤条件は上記の酪農条件の悪さと全く同じ、あるいはそれ以上に悪いとさえ考えられる。条件が同等としても、今までの経験が生かせる有利性を考えれば、やはり水田酪農での経営発展を考えるのが常識といえよう。しかも町内では最も酪農に適した条件を持つ地帯に属している。ただ一般的な動向として、将来

酪農でない近郊酪農的な性格が強くなることは考えられるが、いわゆる農家の酪農は、粗飼料自給を前提にしたほうがやはり有利だろう。そして将来技術の進歩が考えられるので十分途は拓かれると思われる。

(2)

生産費調査その他の統計から標準的な適正規模は前記Iのとおりである。「多頭化への課題」という質問の意味がわかるような気はするが、十分納得しきれない。というのは、経営の問題とすれば、経営の目標は常に収益あるいは所得の最大化であって、多頭化は単なる手段にすぎない。したがって多頭化は所得増大の一方法ではあっても、総てではなく、例えば多頭化のみにとらわれるとき、極端な場合には技術のバランスが失われて利幅が狭くなり、赤字さえ考えられ、この場合どれ程大きい規模拡大も意味がなく、むしろ少数精鋭主義に劣ることになる。したがって、あなたの経営の場合、多頭化を問題にする前に、現状規模での経営改善を行うのが順序と思われる。

例えば一頭当りの乳量は標準並であるが、牛乳一〇〇kg当りの生産費は標準を上廻り、ことに飼料費は標準を五〇%以上上廻っていることから、飼料給与の検討、合理化が必要である。理屈は十分わかまえていようなのであるから、要はそれを実行し、せつかくの飼料を効率的

に利用するよう努めることである。重ねていえば、乳は搾り取るのではなく、牛の生理に応じた合理的給与をすれば、無理をしなくとも自然に能力一杯の乳が搾れるのだと理解し、得るためには先ず必要な養分量を無駄のないバランスのとれた状態で与えることを考えるべきで、これが知識としてでなく、自然に実行できるように体が技術を覚えた時、規模拡大の効果が生きてくるのである。

(3)

多頭化として規模拡大において注意すべき点は、一口にいえば、常にバランスを失わないこと、多頭化に応じた粗飼料確保と合理的飼養管理、そして必要労働力の増加に伴って、規模に見合った機械化を進めることである。そしてまた、酪農の基盤条件を整備することに注意を向けてもらいたいものである。これは同じようなやり方をしても、条件の悪い経営のほうが生産費が高くもろくは少ないからである。多くの場合、基盤整備は個人の力では困難であるが、個人でも可能な、例えば牛の質を高めるとか、畜舎を働きよい省力的な構造に改善するとか、サイレージや乾草の給与体系にして収穫労働力を削減するとか、畜舎とサイロ、飼料庫の配置を改善するとか、所有地内ですく機械力を十分行使できるように圃場区劃を大きくしたり農道を広げたり、排水施設を整備したりすることは大切な問題で

ある。これらは一見目に見えないようであるが、積り積って大きな利につながるものである。

(4)

以上のことは「カン」であるといど改善できるが、より進んだやり方で効果的な改善を望むならば、投入労働、物財および産出物の物量、金額両面の詳細な記録と分析が必要である。他人の記録は一応参考にはなるが、経営条件が非常に違うから絶対的なものではなく、記録はやはり自分のものが最上の価値をもっている。そのために、経営分析に必要な記録、特に技術的にも検討できる記録をとるよう願いたい。

なお、詳しい技術的指導の個々については、誌面上のつごうで省いている。

北海道の自然に抱かれて

北海道山越郡八雲町大新落合牧場内

大木 秀雄 (賀陽町出身)

八月報告より

今月は先月まで比べて仕事は楽な日であった。といっても私にとっては、朝五時から夜一〇時すぎまでまったく心のやすまる日はなかった。北海道研修の目的は何であったのか、考えれば考える

ほど、今の私の実習はあまりにも簡単にすぎ去ってしまう。

八月二日八雲町共進会、十一日道南共進会、二十二日八雲町部落視察と見学することができた。見学のために休日に向けて下さるご主人に頭が下がる。見学をとおして北海道酪農の姿を見、またこの牧場においても酪農の姿を見、またこのこの地で生活してゆくには、体力の強さの必要性を改めて教えられた。

九月報告より

今月の上旬から中旬にかけてバレイシの取り入れをする。これは内地の種にもなるものである。また、サイロの詰め込みを始めた。毎日のきびしい作業の中で、日々の記録を読みあげてみると、初めて一環した作業体系が生まれてくる。下旬には数十haもの土地より、冬期分の寝わらにする野草の取り入れを共同作業で行なった。

毎朝五時の起床であるが、九月も半ばを過ぎると、外はまだ暗い。ねむい眼を

こすりながら牛舎に行く。北海道の冬ははやい。肌寒い外気で気分をはっきりさせて搾乳にとりかかる。こんな毎日のくり返しをしながら仕事を自分のものとしてゆく。

しかし、実習生活の中で、自分の勉強をしてゆくことは大変難しいことである。九月の一月月をとって見ても、酪農とまったく関係外の仕事もかなりある。ただ単に、労働のために実習をしているのではあるまいかと思うこともある。そういうときに、近所に若い人がいたって少なくて話し相手がないことが非常に残念なのである。八雲町大新地区の一〇年前の農家は六〇戸あったが、現在は四〇戸、そして三〇戸にはなるだろうとの話であるが、日本の農業が生きてゆくために、現在本当に大切なことは、若い力が農村に残るということであろう。

機械類の作業もここに来て一応身につけた。乳牛に対する考え方も、企業的酪農経営という割り切った考え方も少しは身につけて帰りたいと思っている。土地条件の異なるこの地での実習が全て役立つことはないであろう。しかし、酪農経営に対する新たな希望をもち帰り、私の生涯をかけて自立経営の道に役立てたいと思う。

半ばに賀陽町の竹並、繁田さんが北海道視察の帰りによってくれた。久しぶりに話す岡山の人との時間はすぐたつてしまった。

後継者研修生報告

その3

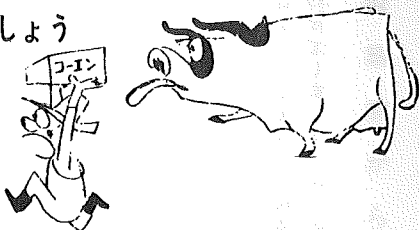
肥育牛に多発している 尿結石症を治療・予防しましょう

固型カウストン

乳質改善 乳量増加に
毎日 鈣 塩 をあたえましょう

日本全薬工業株式会社

那 山 市 昭 和 1 丁 目 15 - 23
TEL (2) 5 1 1 5



日本全薬工業(株)岡山支店

岡山県津山市井口25卸センター内
TEL (2) 9 2 5 1

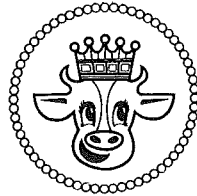
乳は国産 エサは全酪

団結は力！
系統利用は団結の象徴

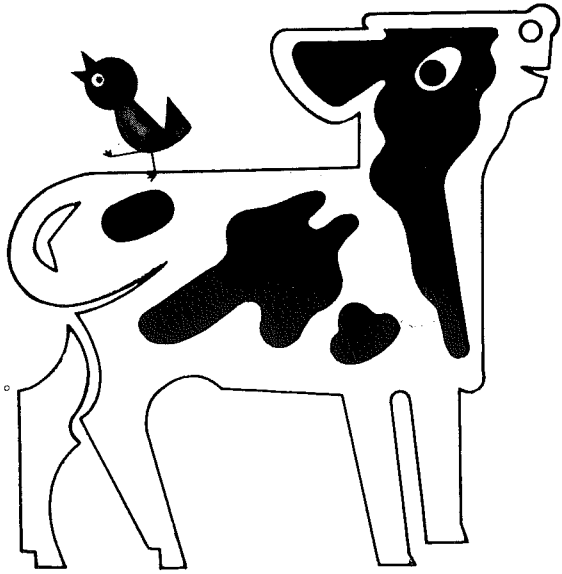
最高の水準をゆく全酪連乳用子牛育成体系
(乳牛の飼料は専門的全酪連におまかせ下さい)

主要取扱品目

専管、増産ふすま、外国大麦飼料。
カーフトップ、脱粉飼料、カーフスターター。
幼牛用、搾乳用配合飼料。
その他酪農用飼料資材全般。
市乳、バター、チーズ、練乳、粉乳。



日夜酪農民の利益増進に奉仕する酪農専門農協！
全国酪農業協同組合連合会



本誌の予約申込要領

誌代 一部 五十円 (送料共)
年間予約約六百円 (送料共)
但し一部購入の場合は増頁号の誌代をその都度の価格とし、年間予約者は増頁特集号の分も一部五十円のサービス価格とす。

集団申込の特典

十部以上を一括で年間予約する方は一部誌代を四十五円にします。百部以上を一括で年間予約する方は一部誌代を四十円に割引きます。但しこの場合は一括購読です。個人別発送は致しません。

申込方法

同封の振替用紙に代金を添え住所氏名明記の上申込んで下さい。集団申込は代表者の名で何人分かを明記、誌代合計金額を払込んで下さい。但し申込みは前金を建前としております。

申込先

岡山市下石井二一六一四一五
社団法人岡山県畜産会指導課
(電話) 岡山 〇一八五七五番
(口座番号) 岡山八五七五番

岡山畜産便り (十一月号)

第二一巻 第十号
昭和四十五年十一月二十五日発行
発行所 岡山県畜産会
編集人 津野毅士
印刷所 岡山市下石井二の六
電話 〇八五七五番
振替 〇八五七五番
岡山市内山下七五番
ふじや高速印刷所
電話代表 〇四九五一番
一部五十円 (送料共)

編集室から

今年はおとずれが一段と早いようである。県南の水田地帯では例年より半月も早く取り入れが始まっている。しかも小型コンバイン等の導入が競争のように行われて、ずいぶん早く終りそうである。しかし、米価据え置き、秋口の高温でいもちの発生をみ、収量減、品質低下が目に見えており、その表情はすぐれない。来年も米の生産調整が行われる予定であるので、牛乳の農薬残留問題などもからんで、酪農家の水田転換はますます進み、専業化は一段と進められるであろう。しかし、労働と所得の問題から先行き不安をもっている人もずいぶん多いようであるので、今月号では、県南酪農家のコンサルテーション助言指導の例を誌上に収録してみた。皆さんの批評を賜りたいものである。

近江八幡様

滋賀県近江八幡市仲屋町西川牧場内

井原 申博 (津山市出身)

六月報告より

今月は雨降りつづきで、かえって身体がだるくてやりきれない。現在も一日おきに雨が降っている。野山はとても美しくなっており、田んぼの稲も分株を始めており、田の草取りをしている人が多く目につくようになった。

先月の終り入った子牛(淡路産)二〇頭のうちの三頭と、前からいた育成牛九頭のうちの二頭が、流感の予防注射をしたら反作用が出たらしく死んでしまった。それに現在も子牛は熱が一日おきぐらいに出るためカナマイとストマイを注射しているが、さっぱり治る様子がないようである。そのため二十日に京都から微生物研究所の先生が来て、血液、鼻汁等を持って帰ったので原因がはつきりわかるだろう。

育成牛がこんな調子であるので今月は休みがもらえない。もっとも休みどころではない。

七月報告より

上旬は台風の影響で仕事ができなかったが、下旬によくややく夏らしくなってきた。乾草作りにおわった。

五月に入った子牛の調子もだんだんよくなり、ほとんど治ったように思われるが、毎日体温を測定し、温度の高い牛にはカナマイ四〇、ストマイ四〇を注射しているが、最近熱を出す牛がないので安心してはいる。

今月は子牛も入り(淡路産三五頭、草津産八頭)、頭数も多くなったので(育成牛一四頭、肥育牛五三頭、計一九四頭)忙しくなった。

近所に組合有の牛舎があるが、その牛舎を見て感じたこと。
○飼槽がやや低すぎる。
○牛床の傾斜がきつくと牛がすべり易い。
○かんぬき巾が一定でない。
○換気口がない。
○育成牛の運動場がない。

豚の雄屋からの便り

静岡県榛原郡相良町中西中山家畜授精所内

水川 由喜生 (真備町出身)

六、七月報告より

研修に入り四カ月が過ぎようとして、毎日三〇℃を越す猛暑のなかでの仕事はなかなかつらい。しかし、身体がなれてきたせいも、ここへ来た当初より楽になった。自分ながら黒々と日焼けしてたくましくなったように思われる。

仕事は相変わらず、一般管理、種付け、運搬、そして治療のくりかえしである。新しく導入した圧力ポンプを利用して作業効率をあげている。今まではうきでできなかったところの掃除、豚の体温低下を図るための水かけと便利である。また、豚の運搬は昼間は暑くてできないので、朝夕の涼しい時に運んでいる。そのため朝少し早く起きて仕事にかからねばならないので、少々つらい。

豚の治療は発情豚を農家へつれにいった時、病豚がいるのでみてほしいといわれ、いろいろ指示をして帰るのであるが、今度いった時、「あの豚よくなったよ、

ありがとう」といわれるとうれしくなる。しかし「死んじゃったよ」といわれるとがっかりする。そんな時まだまだ未熟なんだと反省し、その処置を考え直してみよう。

また、はずかしいことであるが、生き物を飼う者にとってもっとも初歩的なことであると考えられる家畜に対する愛情が今になってようやく芽生えはじめてきた。こんな毎日を送っている現在の心境ではまだまだ将来に対して不安もあるのであるが、ぼつぼつ希望をもみい出している私でもある。

こんな不安を取りのぞくためにもさらに研修にはげみ、できればここでの研修がすめば他の研修先へも行きたいと思っている。

とにかくここで学びとれるものは早く身につけてしまいたい。